連載Ⅱ
当財団専門委員
わたしの1冊
第3回

早稲田大学　商学学術院教授　　守口　剛

『つきあい方の科学 ―バクテリアから国際関係まで』

R.アクセルロッド著、松田裕之訳

ミネルヴァ書房　1998年（原書『The Evolution of Cooperation』の出版は1984年）

この書籍はゲーム理論をテーマとしたものだ。と言っても、ゲーム理論を理論的に検討した書籍ではなく、反復囚人のジレンマというゲームの結果を検討することで、日常の人間関係から国と国との関係までを視野に入れて、どのような心構えで相手と付き合うべきかが検討されている。

アクセルロッドの整理によると、相手を出し抜いて自分だけ得をするという行動は、1回だけのゲームであれば功を奏することもあるが、反復ゲームでは決して高得点をあげることはできない。自分だけ得をしようという考えは、ゲームの対戦相手にもそのように考えることを促すことになる。双方がそう考えると泥試合になってしまい、お互いに低い得点しかあげられない。

長期にわたる反復ゲームでは、互恵主義に基づく戦略が最も高い得点をあげる、というのがアクセルロッドの主張だ。この戦略は、ゲームの相手と自分の双方が、ある程度高い得点をあげることを目指すというものである。互恵主義の戦略では、自分から裏切ることは絶対に行わないため、対戦相手にも協調を促すことになり、その結果両者ともにそこそこ高い得点を安定して獲得することが可能となる。

アクセルロッドは、そのような考えを理論的に導きだしたわけではない。反復囚人のジレンマというゲームを用いた大会を2回にわたって開催し、さまざまな領域の研究者がいろいろなルールをつくって大会に参加した。その大会において、常に安定して好成績を収めたのが、前述した互恵主義に基づくルールであった。アクセルロッドは、そのルールがなぜ好成績をあげたのかを、さまざまな対戦相手との成績から詳細に分析し、付き合い方に関する一般的な示唆を導きだしている。

人と人、企業と企業、地域と地域、国と国、さまざまなレベルにおける「つき合い方」を考える上で、大変示唆に富む書籍である。多くの方々に広くすすめたい。

（もりぐち　たけし）

守口剛（もりぐち　たけし）

早稲田大学商学学術院教授。財団法人流通経済研究所、立教大学を経て、2005年より現職。早稲田大学政治経済学部卒業、東京工業大学大学院博士課程理工学研究科経営工学専攻修了、博士（工学）。日本消費者行動研究学会会長、日本商業学会副会長、日本マーケティング・サイエンス学会理事などを歴任。主な著書に、『プロモーション効果分析』朝倉書店、『マーケティング・サイエンス入門』（共著）有斐閣アルマ、『消費者行動論：購買心理からニューロマーケティングまで』（共編著）八千代出版など。